

数字に強い

アドバイザー 公認会計士
香川 晋平氏
Shimpei Kawawa

社員を目指す！



数字に強い人とそうでない人。

会社にとって必要なのは、「数字に強い」人材だそうだ。

基本的な会計知識を身に付け、その知識を生かして

自分の仕事を「会社の利益」につなげることができると……。

今回は、公認会計士の香川晋平氏に

「数字に強い」社員になるためのポイントを伺った。

**自分に課せられた仕事か
会社の利益にどうつながるのか**

社会人であれば「数字」を意識しながら仕事をするのは、基本と言われている。しかし、実際には数字に興味がない社会人も少なくない。その見分け方はあるのだろうか？

「数字に強くない社員は、日常の会話からも簡単に見分けることができます。例えば、会話の中に『かなり』や『少し』を連発する人。『かなり増えています』とか『少し減っています』といった表現を多用する人は、

感覚的な発言が多く、話に具体性がないのが特徴です」

一方、「数字に強い」人は、「今月の目標売上達成まであと50万円です」などと、会話の中に具体的な数字がよく出てくる。

「それだけではなく、自分に課せられた仕事で会社の利益にどうつながるか、常に意識しながら、利益貢献の度合いを自ら計算しています。ゲーム感覚で数字を意識している人も多いですね。上司から『この新商品の年間売上目標は3億円だ』と言

どうすれば手待ち時間を削減できるか？

あなたは、自分の1時間当たりの給与を考えたことがあるだろうか。25万円の給与をもらっている人なら、

1日8時間勤務、1ヵ月20日間出勤するとして、1時間当たり約1600円の計算になる。

「その人が、何かの作業を待っていて手を休めている『手待ち時間』

大きな数字も身近な数字に置き換えて、ゲームを攻略する感覚で仕事を進めてみる！

にも、実はコストがかかっているのです。1時間の手待ち時間があれば、会社にとっては約1600円の損失になっています。ですから、手待ち時間を削減することも立派な会社への利益貢献になるわけです」

自分の仕事の進み具合は、他の社員の仕事にも影響する。つまり、手待ち時間を減らすためには、仕事を依頼されたときに、「何を」「いつまでに」「どのくらいの精度で」こなす必要があるのかを意識して、他人の手待ち時間を考える必要があるのだ。また、自分に手待ち時間が生じた場合には、業務の時間配分を見直すことも重要という。

「管理や開発部門で、8人の社員が集まって1時間の会議をしたとしましょう。この会議のコストはいくらだと思いませんか？ 会計的な視点で考えると、従業員1日分の給与と同じ。会議がそれと同じだけの価値を生み出しているでしょうか？ そうは思えないケースも多いはず。ならば、会議に臨む前にテーマや決定すべき事項など、『会議の目的』をより明確にすることで、時間短縮を図れば……。『時間当たりの生産性』は常に意識したいポイントです」



香川 晋平氏 (公認会計士)

1972年、兵庫県尼崎市生まれ。関西大学非常勤講師。大手監査法人を経て、30歳でリフォーム会社の財務担当役員に転身。「従業員1人当たり数値」を導入し、在任2年の累計利益は業種別No.1となる。2005年に香川会計事務所に入所。中小企業の会計顧問や非常勤役員を務め、従業員の生産性向上に力を入れている。

今月の
アドバイザー

あなたは「数字に強い」or「弱い」社員？

チェックリスト

- 「かなり」や「少し」といった言葉をよく使う
- 自分の給与なら「会社にいくらの利益貢献が必要か」知らない
- 自社の「ビジネスモデル」を答えられない
- 根拠はないが、自分の会社は潰れないと思う
- 会社の利益を上げる方法を10個言えない
- 会議で自ら発言することはほとんどない

※チェックが3つ以下なら「数字に強い社員」
4つ以上なら「数字に弱い社員」です。



オススメの一冊



東大卒でも赤字社員
中卒でも黒字社員
会社が潰れない人は、利益が出せない人
リウウラン著
アズキ新書 840円

「学歴」と「会社での評価」には、まったく関連性がない。「ある意識」を身に付けていれば、会社から評価され、高学歴社員を超える力を持つことができる。それは、「会社の利益に貢献する」という意識だ。では、どうやってその意識を身に付けられるのか。「数字に強い」社員になるためのノウハウが一杯詰め込まれている。